

個人と社会

——ハイデガー、ブーバー、オルテガの諸見解についての一考察——

長谷川 高 生

Individual and Society

—— A Study on the Opinions of M. Heidegger, M. Buber and J. Ortega y Gasset ——

Kosei HASEGAWA

*In this paper I try to analyze the relationship between individual and society through the consideration on the opinions of three famous western philosophers, M. Heidegger, M. Buber and J. Ortega y Gasset. First of all, M. Heidegger shows the ontological distinction between entity (Seiendes) and being (Sein), and according to his view, the being of Dasein is 'care' (Sorge) and the meaning of the being of Dasein is 'temporality'. By the direction of this 'care', Dasein has two modes of being: unauthenticity (das Man) and authenticity (eigentliche Existenz). These modes of existence are constructed in the world, and so Dasein is called Being-in-the-world (In-der-Welt-sein). This Being-in-the-world contacts with the world of utensils (Zeuge) by 'attention' (Besorgen), and with the world of others by 'nurturance' (Fürsorge). Next, M. Buber puts special interests on the relationships between subject-object through 'arts' and between subject-subject, and particularly on the relationship between I-Thou (Ich-Du) with 'love'. In his opinion, man can find mystery of God by 'religious revelation'. Thirdly, J. Ortega y Gasset starts from each one's human life which is the radical reality and consists of him and his circumstance. In this world of circumstance, we find things and others. In the relation to things, we find minerals, plants and animals on the 'pragmatic fields', and in the inter-individual relationships, we 'co-live' with parents, lovers, and friends. With relation to the majority, Ortega point out the revolt of the masses in the present days. In the social life, Ortega put a special focus on the phenomenon of 'usage' (uso), impersonal, irrational, and pseudo-natural. This usage automatizes human behaviors and makes man live a creative life at an altitude of the times. The difference of these opinions on individual and society designed by three philosophers depends on the characters of their own philosophies: Heidegger's theory of being, Buber's theology and Ortega's philosophy of life.

Key words : Dasein, I-Thou, human life, das Man, usage

現存在、我 - 汝、人間的生、ダス・マン、慣習

— 社会にあっては、「個人」と「社会」をいかに結びつけるかは最も重要な危機的問題の一つであろう。実存「近代」という時代が行き着いた果ての現代の大衆に基づく存在の哲学をめざす哲学者であったハイデ

受付 平成14年9月18日, 受理 平成14年10月30日

近畿福祉大学 〒679 2217 兵庫県神崎郡福崎町高岡1966 5

ガー（1889 - 1976）は、現存在が存在の意味を問わず、非本来的日常性のなかに埋没していることにこの危機を見だし、生・理性の哲学者オルテガ（1883 - 1955）は、自己疎外の状況にある大衆の反逆としてこの危機をとらえる。有神論的実存主義者とみなされるブーバー（1878 - 1965）は、この問題の成熟原因を(1)社会学的性質のもので、人間の直接的連帯生活の有する古い有機的形式の絶えざる崩壊と、(2)精神史的性質のもので、人間の自ら生みだした世界 - とくに技術、経済、政治的現象 - の支配不可能による魂の衰弱と挫折の体験との二つを挙げる。個人と社会の問題については、マンハイム（1893 - 1947）やデュルケーム（1858 - 1917）は社会学の方向より、ハイデガー、サルトル（1905 - 1980）は実存哲学から、ブーバー、ベルジャエフ（1874 - 1948）は神学的アプローチにより、また生の哲学からはオルテガ、ベルグソン（1859 - 1941）が独自の接近を試みている。ここでは実存分析から存在の意味を追求したハイデガー、有神論的立場から我 - 汝、我 - それ、我 - 神の関係を論じたブーバーのハイデガーへの批判、生・理性の立場より遠近法主義を用いて、社会に近づいていったオルテガの思想を述べてみたい。

二

ハイデガーはギリシアより現代まで混同されてきた存在者（存在し現象しているもので、自己自身を表現しているすべてのもの）と、存在（いかなる現象より根本的で、現象に有性、本性を付与するもの）との存在論的差異を提示する。この存在については、語源的・形而上学的分析で、ギリシア語の *physis* より分析して、存在が時間性と結びついた動的なものであると証明する。たとえば『存在と時間』においては、存在への問い自体を三つの形で問う。(1)問われているものは存在であり、(2)問いただされているものは存在の意味であり、(3)問いかけられているものは、現存在 *Dasein*（人間）である。つまり人間こそ、存在への問いを提起できる唯一の存在者であり、それゆえ存在了解をその本質とする。現存在の存在は「関心」であり、この関心の方向によって本来的実存か非本来的実存かに立ち得る。人間的現存在は日常の実存を自らの身近な在り方としているゆえに、本来的実存と存在そのものについての理解のためにはまず、この日常的（非本来的）実存の現象学的分析を試みる必要がある。現存在は関心によって自分自身を理解し、自分の可能性を把握しようとする可能性そのものであって、その可能性のなかに人間は、自己を脱自的に未来に向

けて投げかけ投企する存在者である。また現存在の構造は心境（情態性）という被投的性格を持つ。すなわち世界に投げ出されているという被投性の感情を感じる。したがって、人間は被投的に投企する動態的存在者である。人間的存在者の関心の実存的構造は、時間性によって根拠づけられる。未来に向けての投企の可能性を過去に実現してきた可能性によって現在に規定する。人間は彼の過去と彼の未来であって（これが彼の現在であって）人間それ自体、時間性である。非本来的実存のなかでは彼固有の時間を忘れ時間を対象化するが、本来的実存のなかでは、彼固有の時間であると気づく。とりわけ彼の究極的可能性としての「死」 - 有限性 - に気づいたときに、その対応により、非本来的実存と本来的実存の別れ道がある。以上の人間による可能性の投企は、現存在にふさわしい一つの構成契機としての世界のなかで行われる。ゆえに現存在は「世界 - 内 - 存在」である。すなわち、これは(1)世界、(2)内存在、(3)世界のなかの誰か（共同現存在）の三つの要素によって構成される。まず現存在は環境世界のなかで(1)道具として用いられているものと、(2)目前にあるにすぎぬものに出会う。前者は目的をもったもので、現存在の関心領域のなかで道具全体性をつくる。現存在に「配慮」される世界であって、この世界に埋没すれば非本来的実存にはいる。後者は論理的・合理的探究の対象となり、主観・客観の分離が可能となる領域である。また世界 - 内 - 存在は他人 = 共同現存在と共にある存在である。この共同現存在は現存在に「顧慮」される存在である。そして私は、私の世界を他者と共有することによって本来的実存としての私自身を忘れる。他者は自己疎外、日常的世界、存在の可能性を平準化し存在の負担を免れようとする非本来的自己によって構成される「ひと」・*das Man*の世界を生み出す。この非本来的世界において現存在を本来的自己へめざめさせるものが、現存在自身の死への被投性を気づかせ、さらに存在の無性を開示する「不安」という根本気分なのである。本来的自己は、この根源的な不安を契機として甦る良心の叫びを耳にし、死にいたる存在としての一連の可能性としての自分自身をひきうけようと「決断」することで得られるとする¹⁾。

三

以上のハイデガーの哲学をブーバーは、哲学的人間学ではなく基礎的存在学であるゆえに、具体的な多様性と複雑性とを伴った人間を扱うのではなく逆に、人間を通して自らを提示する現存在それ自体を取り扱っ

ているとする。ブーバーの人間は三重の生活関係を持っている。それは(1)世界及び物の関係、(2)人間すなわち、個人及び多数者との関係、(3)二つの関係を貫いて現れつつも、それらを根本的に超越する存在の神秘との関係である。そして人間の本質的關係を、物との関係では芸術に、人間との関係では愛のなかに、神秘との関係では宗教的告示のなかに、見いだす。この立場よりハイデガーを、時代的制約の下にある極度に孤立した人間の状況を絶対化し、人間が自分自身にかかわっている領域を生活全体より絞め出したと批判する。まず物との関係において、ハイデガーは配慮の対象とするが、これは技術的關係である一定の目的への応用可能性、物の技術的屬性のみの関係であって、物に対する本質的關係は物に心を傾倒する関係 = 芸術ではないとする。他人との関係においてハイデガーは、顧慮関係を主張するが単なる顧慮では人間は他人のことに立ち入るが、他人が自分のことに立ち入ることを決して望んでいない。本質的関わりにおいては、個人的存在の枠は突き破られ、実存から実存へ開放され、自己の神秘において他人の存在の神秘を体験する。ハイデガーの人間の到達し得る段階は、世界から遊離せずようやく世界と共存する正しい現存在を実現するまでに成熟し、それに向かって決意している自由な自己の段階である。しかし共存のなかで自己の枠が突破される確信なく念願もない現存在は、自己存在の内部で完成されるゆえ、ハイデガーの自己は一つの閉じた体系である。非個人的な多数者との関係については、ハイデガーは *das Man* として多数者を自己を阻害する純粹に否定的なものとする。しかしブーバーはこの関係に互いに汝と呼び交わす「我ら」を主張する。「我ら」こそ人間がはじめて「ひと」= *das Man* から解放される領域であり、ハイデガーの分離は「ひと」からの解放ではなく、真の結合こそ解放である。神との関係についてはハイデガーはこれを存在の本質として示唆しつつも明確には言及せず、まさに一個の自己が自己自身に開き得るとしているが、自己に対して開かれるこの自己は、本質上閉鎖的であり、究極的に人間は自分の前に立ち得ないゆえに、ハイデガーの人間は憂慮と不安のなかで無の前に立つ。現存在が自分自身に自己存在にかかわっている生の一部分を結紮することによっては、根源的負目存在は発見できないのである。個人がまさに彼以外のものと本質的にかかわっている生の全体を制限なしに認識してはじめて発見し得る。人間生活は、その対話的性格を通してのみ絶対性(神)に触れるのである²⁾。

以上ブーバーは、ハイデガーの自己を一つの閉じた

体系として批判したが、そのために神を持ち出した。しかし哲学という分野に絶対的超越者をかかわらせて、ハイデガーを非難することはハイデガーに対する不満足の表明ではあり得ても、ハイデガーへの批判ではあり得ないであろう。ハイデガーの共同存在論を批判するならば、哲学の場で行うべきであろう。

四

次に、神を用いずに「個人と社会」の問題をとらえ、しかも、ハイデガーの哲学の深さゆえのその「自閉性」(hermetismo)を嘆いたと言われる、オルテガの接近を論述しよう³⁾。オルテガは、根本実在としての人間の生より出発する。根本実在とは各人にとって、実在であるかぎり、他のすべての実在がそのなかに現れなければならない実在、したがってそこに根をはっていなければいけないような一義的本質的実在であるゆえ、人間的生はもっぱら各人の生、私の生だけを意味する。この実在は実存主義のそれではない。実在そのものが与えられたものであり、しかもその生を各人が自分自身で作り上げねばならない。その意味で、生は根本的孤独である。しかもこの生は、デカルトの観念論にもアリストテレスの実存論にも与みしない。そしてこの人間的生を中心として、(1)世界と、(2)そこに含まれる物と、(3)これらの物のなかにいる他の人間が存在する。まず世界の構造に関して、第一層においては、注意を引きつける物、すなわち「現前」するもの、第二層においては、物がそこから現れてくる場所の視界の地平線があり、第三層においては、現在は隠れている、地平線の向こうにある「共 - 現前」する物がある。これらの物はわれわれのために存在するものであり、目的性と奉仕性の連鎖で結ばれている「実用的場」である。この世界は、「私のここ」から眺める一つのパースペクティブである。この世界にわれわれは鉱物、植物、動物そして、人間を見いだす。石や草木に対するわれわれの行動は一方的であるし、常に自己疎外にある動物とは社会的交わりはあるが、きわめて限られている。そしてついに、生の地平線上に「他者」が出現する。各人は他者と共にひとりである。他者とはたんに共 - 現前するだけの内面性である。人間は自我の体験に先立って、他者が存在するという根源的体験がある。すなわち、生きるより先に、すでに共存している。人間は生まれながら利他主義である。他者についての認識は深まり、行動に向かう。そしてわれわれの生たる根本的孤独の底から、自分の生と相互に浸透し合う人間の生を見つけようと試みる。これが友情であり愛であり、孤独を交換しよう

する試みである。社会的な事実は孤独としてのわれわれの人間の生の行為でなく、われわれが他者に行動して関係を結ぶかぎりにおいて現れてくるものであり、厳密・源初的には人間の生ではない。それは人間の共存のなかから現れる何かである。個人間の関係よりなる世界である共存とは、自分にとって意味をもち、しかもそれを理解しているがゆえに行為するところの自己の行動の創造的かつ責任ある主体が、同じような特徴を持った他の個人に働きかける親子・愛人・友人関係のことをいうのである。しかしそれだけでは社会的な事実はない。「慣習」という事実がある。これこそがオルテガのいう社会的なものの本質である。慣習とは(1)非人称的な不特定の主体 = 「人々」、集団、社会の名の下にわれわれに機械的負担を課し、(2)われわれに予測的な圧力をかける超個人的・非人格的実在であり、(3)非合理的なものである。社会は人間的なものでもなく、超個人的なものでもなく、慣習という純粋な自動規制だけを通じて働くものである。つまり自然と人間の間にある何か、準・自然で非合理的・機械的なものである。しかし社会は、人間が作りだしたメカニズムであるがゆえに、人間を作りだす。すなわち(1)慣習は未知の人との準・共存を可能にする。つまり見知らぬ人の行為を予見することを可能にする行為規範であり、(2)ある種の行動・見解、規範、技術・のレパートリーは時代の高さに生きることを個人に強い、過去に蓄積された遺産を注入する社会のおかげで、人間は進歩であり、歴史である。(3)人間の行為の大部分を自動的にし、人間が自己の個人的・創造的・人間的生をある方向に集中することを可能にする⁴⁾。そしてオルテガは母国スペインというパースペクティブから以上の慣習論を応用するとき、スペインの歴史的運命に関して、旧来の悪習を廃して新しい慣習を創造すべきであるとの診断を下すのである。

五

以上、「慣習」という現象に考察の焦点を当てたオルテガの社会哲学は彼を世界的に有名にした『大衆の反逆』の「凡俗な大衆」と「選ばれた少数者」という対概念とはまた別の社会学的次元において、オルテガ自身の南欧生まれ特有のラテン的気質のなせるゆえか、生の概念とパースペクティブに対応する意味ではハイデガーほどの緻密さを見せない反面、否定的側面のみを写し出すハイデガーの非本来的 *das Man* の世界の否定面のみならず肯定的側面をも捉え暴露する。またブーバーのごとく「我 - 汝」、「我 - それ」の関係の追求の深さはないが、神を用いずに個人と社会とを結

びつけた。結局、ハイデガー、ブーバー、オルテガの人間の差異は、彼らの哲学、すなわち存在論、神学、生の哲学というそれぞれのアプローチの仕方に存するのである。これらの三人の現代の哲学者に共通する思想様式は、彼らの思想的活動の時期が三者三様にファシズム期に位置していることから彼らの思想と全体主義との関連性が取り沙汰される不運が存在するにしても、ハイデガーなら「世界」や「*das Man*」、ブーバーは「汝」や「我ら」、オルテガは「環境」や「慣習」というような、自己の周囲に広がり延びゆく周囲環境・他人世界をその視野に包含していることであろう。したがって彼らの提示する「個人」と「社会」とを結びつける試みはデカルトやカントの理性的人間やマルクスの労働者などの「近代」の哲学者の想定する孤立した人間を結びつけ包括し、ポストモダンの新たな人間像と社会像の構築に示唆を与えるものとなる⁵⁾。(参考図参照のこと)

参考図

	関係	物	他人	多数	自己 あるいは神
ハイデガー	配慮		顧慮	ダス・マン	現存在・存在
ブーバー	我 - それ (芸術)		我 - 汝 (愛)	我ら	神秘 (宗教的告示)
オルテガ	実用的場		対個人的 関係 (共存)	大衆・慣習	人間的生

註・引用・参考文献

- 1) ティリアキ、田中義久訳：個人と社会 - 社会学と実存主義の視座構造 -、159 - 178、196 - 201、みすず書房、1971 (Tiryakian, E. A.: SOCIOLOGISM AND EXISTENTIALISM—Two Perspectives on the Individual and Society—, Prentice-Hall, Inc., New Jersey, 1962) ハイデガー、桑木務訳：存在と時間、上・中・下、岩波書店、1960・1961・1963 (Heidegger, M.: SEIN UND ZEIT, Max Niemeyer Verlag, Halle a. d. S., 1935) Marías, J., tr. Appelbaum, S. and Strowbridge, C. C.: History of Philosophy, 425-441, Dover Publications, New York, 1961 Ferrater Mora, J.: Diccionario de Filosofía, Tomo II, 1591-1600, Editorial Ariel, Barcelona, 1994
- 2) ブーバー、児島洋訳：人間とは何か、87 - 98、99 - 133、168 - 179、理想社、1961 (Buber, M.: Das Problem des Menschen, Verlag Lambert Schneider, Heidelberg, 1948) ブーバー、田口義弘訳：我と汝・対話、みすず書房、1978 (Buber, M.: ICH UND

- DU, Insel Verlag, Leipzig, 1923 Buber, M.: ZWIESPRACHE, Schocken Verlag, Berlin, 1932) Ferrater Mora, J.: op. cit., Tomo I, 438-440
- 3) オルテガ、井上正訳：現代の課題（オルテガ著作集1）268、白水社、1970（Ortega y Gasset, J.: El tema de nuestro tiempo (1923) Obras Completas, Tomo IV, Madrid, 1983）しかしオルテガは「神」は「生の流れの象徴」であると言っている。
- 4) オルテガ、アンセルモ・マタイス・佐々木孝共訳：個人と社会 - 人と人びと について - （オルテガ著作集5）9 - 15、73 - 96、114、340 - 349、白水社、1970（Ortega y Gasset, J.: El hombre y la gente (1957), Obras Completas, Tomo VII, Madrid, 1983）長谷川高生：オルテガ哲学的環境論 - 政治学基礎概念研究のための生・環境・現実に関する一考察 - .法政論叢、35・1、1998 Marías, J., tr. Appelbaum, S. and Strowbridge, C. C.: op. cit., 442-468 Ferrater Mora, J.: op. cit., Tomo III, 2661-2665
- 5) オルテガ、桑名一博訳：大衆の反逆（オルテガ著作集2）白水社、1970（Ortega y Gasset, J.: La rebelión de las masas (1930), Obras Completas, Tomo IV, Madrid, 1983）
- * その他の参考文献は以下の通り。
- 原祐：実存主義の思想家たち - 神と人間との間 - 、勁草書房、1962
- 木田元・野家啓一・村田純一・鷲田清一編：現象学事典、弘文堂、1994
- 谷口龍雄・富永厚編：人間とは何か - 西洋近代・現代の人間観 - 、北樹出版、1992
- 森宏一編集：哲学辞典（新装版）青木書店、1995
- 広松渉・子安宣邦・三島憲一・宮本久雄・佐々木力・野家啓一・末木文美士編：岩波 哲学・思想事典、岩波書店、1998
- Ortega y Gasset, J., tr. Trask, W. R.: Man and People, W. W. Norton & Company, New York, 1963
- Heidegger, M., tr. by Macquarrie, J. and Robinson, E.: BEING AND TIME, HarperSanFrancisco, New York, 1962
- Abbagnano, N.: Diccionario de Filosofía, Fondo de Cultura Económica, México, 1961